

A Christmas Carol について Dickens の文学の中における ghost の働きについて (1)

On A Christmas Carol, In Prose, Being Ghost Story of Christmas
On the functions of ghosts in the stories by Charles Dickens (1)

嶋 田 貴美子
Shimada Kimiko

キーワード：ghost, spirit, 金銭, 貧困, 産業革命, 資本主義

(1)

Dickens は弱冠 20 歳の時 (1833 年⁽¹⁾) から既に文学の世界に異才を放ち始めてはいたが、彼の作品が単行本として最初に出版された⁽²⁾のは、London の風物を写生した sketches という小品をまとめた *Sketches by Boz* (1836 年) であり、これが大いに好評を博したことから *The Posthumous Papers of the Pickwick Club* (通称 *Pickwick Papers*) (1836 - 37) を続けて出版する。この *Pickwick Papers* の大成功により、彼はとうとう Queen Elizabeth I⁽³⁾ と並んでイギリスの二大女王であった Queen Victoria⁽⁴⁾ の治世を代表する作家の一人にのし上がっていく。

Victoria 朝の小説は、後の「知力の鋭さを誇りとする時代⁽⁵⁾」の作者達がモットーとしていたような人間の心理に鋭く切り込みそこに哲学的な思索を見い出すことは目的としておらず、Dickens が「目まぐるしいほど変化の多い場面及び人物を好むこと⁽⁵⁾」を「作者の子供らしさと読者の低級な趣味とを暴露するものと考えて⁽⁵⁾」「Dickens を思想の乏しい⁽⁵⁾」作家であるとみなす批評家は「少なくないらしい⁽⁵⁾」が、それにもかかわらず、彼らの多くは Dickens を「偉大な大衆作家であると見な⁽⁵⁾」しふかい敬意を払っていることも事実であって、Tolstoi⁽⁶⁾に限っては、Dickens を「Shakespeare 以上の大作家であるとほめ、彼の作品にならって作品を書いたほど⁽⁷⁾」であった。

社会改良家、社会批判家として自らを任じていた Dickens は、*Sketches by Boz* と *Pickwick Papers* による爆発的な人気上昇の気運に乗って、矛盾の多かった Victoria 朝の社会に向けられたはっきりとした批判的視点に立った *Oliver Twist* (1838 年) を出版する。この中で Dickens は当時の救貧院の悲惨さ⁽⁸⁾を暴露することにより、効果的に世論に訴えて、ついに救貧院の大改革

を達成せしめたのであった。さらにまたこの *Oliver Twist* の中で Dickens は London の街にもはや收拾がつかないほどにまで蔓延している社会悪についても詳細な描写を加えているが、そこに登場する盗賊や罪人や、また悪臭のたちこめる貧民街の路上の汚物の中に性もなく飲んだくれて横たわっている人々などの、当時の社会悪の中に堕して行かざるを得ない貧民、窮民、浮浪者、浮浪児に対する彼の視点は、常に暖かく、その視点から逆に見られた当時の資本主義社会の底流をなしている唯物的な功利主義を痛烈に批判するのである。そうした社会改良家、社会批判家としての Dickens の視点は、*Oliver Twist* の中で孤児であるまだ幼い Oliver の目を通して遂行されるがそれと同様に、その後に続く彼の作品の多くの中で孤児、あるいは片親のない子がそれらの小説の主役に近い部分を占め、純真かつ無防備な子供の視点から彼らを取り巻く当時の社会悪とその中で生きることを強いられた人間の生き様をより赤裸々に描き出そうとするのである。つまり *Oliver Twist* の次の作品である *Nicholas Nickleby* (1838 - 39) の Nicholas や *The Old Curiosity Shop* (1840 - 41) の少女 Nell, *Dombey and Son* (1846 - 48) の Florence と Paul, *David Copperfield* (1849 - 50) の David, *Little Dorrit* (1855 - 57) の Dorrit, *Great Expectations* (1860 - 61) の Pip などなどであり、端役的な登場人物にまで思いを致せば Dickens の小説における子供の登場は枚挙にいとまがない。そして *Oliver Twist* の Oliver や、*Dombey and Son* の Paul と Florence, それから *Great Expectations* の Pip など Dickens の小説の中でもかなりよく知られている子供に明らかなように、彼らは総じて過酷な境遇に追い込まれながらも極めて子供らしい純真無垢な心を失なっておらず、また孤児としての、あるいは早くから片親を失っている子供としての孤独と寂寥と悲哀の中で真実の愛に飢え、人間を人間たらしめる確かなものを与えそして希求する繊細な心情を伴せ持っている。従って彼らの目に映る大人の世界や人々はまるでよく研かれた鏡に映る映像のように曇りなく確かであり、それを映しながらたどるそのいたいけな子供の苛酷な運命は、子供が純真であればあるほど、また精神的 (spiritual) であればあるほど読者の同情を勝ち得たのであって、そうした子供の持つ崇高な本質と汚れた大人の織り成す社会とを対比させることに人道主義者である Dickens は、自己の主張を展開する最も効果的な手段を見い出したのである。

Dickens の小説の中に見られるこのような子供礼讃の態度は、当論文が係わっている *A Christmas Carol* の場合のようにその小説の主人公が子供ではなく、あるいは主人公に近い所にも子供がいない場合においても色濃く見られるものであるが、これは Dickens が、“Return to Nature⁽⁹⁾” と叫び自然を偉大な教師とすべきことを説き、自らはフランス人でありながら、イギリス文学史上にも多大な影響を与えてその一大思潮であるロマンチズムをイギリスに生み出す一つの原動力となった Jean Jacques Rousseau⁽¹⁰⁾ の思想に多大の影響を受けていたと共に、その Rousseau の思想と哲学をしっかりと受け継ぎながらも自分なりの独特の自然観にのっとった斬新な児童観を打ち立てた詩人の Wordsworth⁽¹¹⁾ に心酔していたということに由来するものであろう。

Wordsworth は “My Heart Leaps up When I Behold⁽¹²⁾” と題された詩に明確に述べられているように自然・子供・大人・死のサイクルにおいて子供をとらえる。そして自然の中に存在する

神を求めていくことを人間の究極の目的とする彼は、自然により近い位置に存在し、その存在自身の中に本質的に神性を保持している子供に対して、「羨望のまなざしを送る⁽¹³⁾」のである。Dickens の場合、Wordsworth が考えたこの natural piety⁽¹⁴⁾と子供との関係の中に子供への羨望の気持をかき立てられると言うような児童観とはやや異なるが、natural であるか unnatural であるかということに善悪の判断の基準を置いていた Dickens が、余りにも unnatural で⁽¹⁵⁾悲惨な生活を余儀なくされている当時の人々の中にそっと置かれた natural な子供に唯一の神性を見出し礼讃し、例えそれが一条のかすかなものであったとしてもそこに人類の救済の光を見出したのは当然のことであろう。Wordsworth にとっても Dickens にとっても nature あるいは natural という言葉が示す究極的な存在としての神は単に彼らの概念としてあるだけであるが、Dickens と同じく Wordsworth の自然観児童観に大いに啓発された George Eliot⁽¹⁶⁾の小説では capital N の Nature は God の代用語として使われる場合がしばしばである。そのような当時の時代思潮もあって nature に絶対的な神性を見い出していた Dickens は、それらの natural な（つまり神性を持った）子供を自らの小説の舞台に活躍させることにより産業革命によって打ち立てられた資本主義社会の当然の帰結である唯物主義、功利主義の弊害を unnatural なものとして攻撃するのである。Dickens が文学活動を行なった Victoria 朝は資本主義体制が確立され、それに付随した経済的な一大変革が成されたのであったが、それはまた政治、宗教などにも波及して、その結果経済・政治・宗教という国民の生活の三本の柱が大きく変わった時代でもあった。しかしすべて改革なるものは改良もあるものの弊害も大きく natural であることからますます遠のいていく社会は、社会改良家である Dickens の感性を大きく刺激することとなった。当論文に係わる A Christmas Carol の一つのテーマともなっているその弊害に対する Dickens の視点を正確にとらえるために、次の chapter では当時の社会状況にふれておく。

(2)

19 世紀前半のいわゆる「文明開化」とも言われるイギリス社会の大変革の礎となった産業革命は、すでに 18 世紀後半から始まっている。つまり産業革命は 1760 年代から 80 年代にかけて相次いで成された紡織機及び綿布機の発明と「J. Watt の蒸気機関とが結びつき⁽¹⁷⁾」「綿工業の基幹工程における『工場制度』が成立し⁽¹⁷⁾」たと共に、「それはあらゆる『他の工業諸部門』にも波及し⁽¹⁷⁾」、結果として社会に工場経営者である資本家階級と、資本家の下で働く労働者階級との二大勢力を新たに社会に生ぜしめた「社会改革」であった。すでにイギリスは、スペインの無敵艦隊を破り「七つの海を制覇した」という Queen Elizabeth I の時代の 1600 年に「イギリス東インド会社」を設立し、重商主義政策を推進していた女王のもとに東洋交易を独占的に行なって来た経緯が、以後 200 年余りもたった Victoria 朝においてもしっかりと受けつがれ、「東インド会社」はなおも着実な地歩を固めて、それはすでに独立を達成していたアメリカや拡大された他の植民地と共に産業革命によって大量に生産されることが可能になり低価格でより取引がしやすくなった商品の重要な取引先となり、「世界の工場」としてのイギリスの資本主義を

更に推し進める格好な条件を提供することになったのである。これら一連の変革はすべて「国民利福」という大前提にのっとったものであり、イギリスの国力は大いに高められ、また国民の生活レベルの向上に寄与する力も大きく、「中産階級の思想及び感情の忠実な代弁者であった⁽¹⁸⁾」Queen Victoria の庶民性と相まって「democracy の長足の進歩を見た⁽¹⁹⁾」のであったが、このような Victoria 時代の社会の近代化は、公侯伯子男という古来からイギリス社会をリードしてきた貴族階級の権力を金の力で脅かす中産階級の台頭を許した資本主義体制の確立によってその基盤が成され、それはまた当然のことながら政治や宗教にも大きな影響を及ぼし、共に大変革を遂げることになるのであるが、この経過をたどることによって初めてイギリス社会は名実共に democracy を基底にすえた近代社会に変貌するのである。

しかし産業革命がもたらしたそのような大きな利点の一方で、資本主義社会が進むにつれて、その中に潜む様々な矛盾がクローズアップされていくことにもなる。その中の最たるものは、国民の生活レベルの向上の陰での大量の貧民層が出現したことであり、それは資本主義思想の底流をなす、唯物的な功利的精神がもたらした人間疎外ゆえのものに他ならない。経済学者のエンゲルス⁽²⁰⁾はイギリスの当時の状況について『『都市に充ちあふれているあらゆる文明の驚威を実現するためには、自分たちの人間性の最良の部分を犠牲にしなければならなかった⁽²¹⁾』』といい、「また工業化が『残酷な無関心』と『無情な孤立化』を一方で生み出し、『言語に絶する貧困』を他方で生み出したことを」「告発している⁽²²⁾」。

子供の頃父親が多額の借金をして返済不可能になり、子供ながらすでに働ける年代に達していた Dickens 少年を除く家族全員が債務者拘置所に入所させられ、窮民や囚人などの社会の底辺に生きる者の悲惨さと屈辱とを自ら身を持って味わったばかりか、その時の半ば貧しい孤児同然の生活が、繊細だった Dickens 少年の心に与えた傷は生涯にわたって癒えることのない痕を残したことと、それから 20 歳過ぎに探訪記者になって見聞した London の貧民街の、おおよそその貧困は知っているはずの自分さえその想像をはるかに越えた極貧にある人々の生活、具体的には、辺りに立ち込めた窒息しかねないほどの悪臭やそれを生み出している周囲の不潔さ⁽²³⁾、それに生活の重荷に堪え切れず窮乏の中でジンに溺れる浮浪者等々への驚きと恐怖と同情と怒りとが、まずは Dickens の最初の単行本である *Sketches by Boz* の膨大な本に結集され、そしてそれがまたその後の Dickens の文学者としての一貫した思潮になったのであった。つまり Dickens は、極貧にあえぎ人間の尊厳を失いながらもなおぼろと空腹と汚濁の中で何とか生きながらえている人々を資本主義社会の犠牲者として humanist の立場から同情し、そして特にそうした厳しい環境の中でも無力ながらけなげに生きている子供に対して温かい目を向けるのである。この Dickens 独特の思想は、大体において *Sketches by Boz* と同様に大作である次に続く作品群の中で展開されるのであるが、この論文で取り上げる *A Christmas Carol* は Christmas の日に炉端で読む本として書かれたものであることから、数時間で読みきれほどの小さいボリュームの作品であるにもかかわらず、これは 1843 年の作で彼の作家人生の中盤にさしかかった頃に書かれていて、資本主義社会の底流を成す唯物的なまた功利主義的な考え方にまっ向対峙する、Christian であり人道主義者であり、また文学者である Dickens の小説の真髓をそつなく知ると

めには格好なテキストとなっているのである。

この *A Christmas Carol* についての論文では、もはや老境に達している London の大商人である主人公 Scrooge に対する Dickens の視方と、その Scrooge の許を訪ねる「Marley の亡霊」、「Scrooge の過去のクリスマスの幽霊」、「現在のクリスマスの幽霊」それから「未来のクリスマスの幽霊」がその話の中で果たす役割と象徴性について論じていこうと思う。

(3)

Dickens はまず Scrooge の人となりについて、a squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous old sinner であると言っている。つまり Scrooge は“けちな男”であったばかりか金もうけにかけては妥協を許さず人情のかけらもない極めて貧欲な罪深い老人 (old sinner) であると定義しているのである。更に Stave One MARLEY'S GHOST の中で亡霊は Scrooge に対して “captive, bound, and double-ironed (二重の鎖で縛られた捕らわれ人)” と呼んでおり、Dickens の目からしたら Scrooge のような金の亡者である人間は、sinner であり captive であるとして徹底的に糾弾すべき人であったのである。この論文の chap. 2 で述べたように Dickens の小説は主人公に子供を据える場合がほとんどであるが、この *A Christmas Carol* とその 3～5 年後に出された *Dombey and Son* の 2 つが珍しく London の裕福な商人が主人公となっており、彼等 Scrooge と Dombey 氏の人となりには共通点が極めて多く、Dickens は *A Christmas Carol* を執筆してなおその Scrooge を十年近く若返らせると共に、その Scrooge の character を更に拡大させた Dombey 氏を今度は長編の *Dombey and Son* の中で作り上げ、そして彼にも Dickens は同様に “captive” という言葉を当てはめていることからすると、当時の貨幣万能時代²²⁾の波に乗って、「世俗一点ばり」の金権の慮になっている者達は、敬愛なクリスチャンであった Dickens の中では総じて sinner (道徳的あるいは宗教的な罪人) または captive (監獄に入れられるべき囚人) として意識されていたということがわかるのである²³⁾。犯罪人の心理に大きな関心を持っていた Dickens は、盗賊とか人殺しとかの司法の上でのいわゆる罪人 (criminal) に対しては、当時の刑罰が大変に厳しくて一般大衆の眼前での縛り首 (死刑) がいとも簡単に行なわれたために、彼らは刑の執行までの時を刻む鐘の音に脅え、自分が危害を加えた人の亡霊や“目”につきまとい安んずることができず、そのような罪を犯してしまったことへの気も狂わんばかりの後悔と焦燥の中で優しさに満ちていた過去の思い出を初めて振り返る²⁴⁾様を彼の作品の中でしばしば描いている。しかし Scrooge (Dombey も含めて) の罪はそうした司法の手にはかけられない、Dickens が個人的に審判したものであり、いわば彼らは Dickens 一人が裁き手となるべき sinner 又は captive であったが、*A Christmas Carol* を読んでみると Dickens はこのような客観的な曖昧さを持つ罪の中にある Scrooge に対して、食べ物も家もなく寒さと空腹にあえいでいた人々が町に満ちていた当時の社会事情からして London の大商人としての富をかかえながらも貧しい者への同情のかけらも示さないことにかなり強い罪人意識を持っている。

そして Dickens は Scrooge の sin を *A Christmas Carol* の中で次々にあばき立てていく。まず Scrooge にとっては神を称える心も死者を弔う気持も、金儲けの意志の裏に何ら意味を成すことはないのである。つまり 7 年前の Christmas の日に「何年とも言えないほどの長い年月の間²⁵⁾」“Scrooge and Marley” という合名会社の partner であった Marley が亡くなった時も、身よりの全くなかった Marley の「ただ一人の遺言執行人であり、たった一人の管財人であり、たった一人の財産譲り受け人であり、たった一人の友人たった一人の会葬者²⁶⁾」であったにもかかわらず、平然といつも通りの business をやり終えるような男であって、彼のその特質は 7 年後の今も変わらないどころかますます増長し、現在たった一人雇っている事務員の Bob Cratchit に年に一度の Christmas の日一日の休暇を与える時でもそれを金に換算し給料から差し引きかねない口ぶりである。六人もの子供がいて自分と妻との八人の大家族を養っているその Bob には週十五シリング²⁸⁾という最低の賃金しか与えていないにもかかわらず雇用者であるという特権から Bob の言動を厳しくチェックしている。自分以外の者のことは「貧乏人のくせに」とばかにし、Christmas のその時期の「冷たい風が吹きすさぶ、噛みつくような寒さ²⁹⁾」がなおも深まっていく夜半に、その寒さを凌ぐ家もなく食べる物もない極貧にあえぐ路上生活者のことに思いを馳せたりする気持はさらさらなく、ましてや年に一度おいしい物を食べ浮かれ騒ぐことが許されている²⁷⁾ Christmas に、そのような自分の力では何もできず街をうろつくだけの人々にせめてほんのわずかながらの食物やまた暖を取るための何がしかでも与えて Christmas を祝わせてやるための慈善事業の趣旨になど全く関心がないどころか、Scrooge の並々ならぬ財力にすがって寄付を頼みに来た紳士達が使った“liberality (寛大さ)”という言葉をおもむきで ominous (縁起の悪い) であると思い寄付の一切を拒否し彼らを追い払う。その代りに Scrooge は、教会の慈善事業で寄付を仰ぎに来た人に向かって最低限の生活の必需品にも事欠いている何万という人々²⁸⁾は監獄²⁹⁾ (prison) に収容するかもしれない救貧院³⁰⁾ (Union workhouse) に入れることを推めており³¹⁾ またその上で「死にたい者は死なせて余分な人口を減らすのがいい³²⁾」とまで思い切った提案をしている。Scrooge には貧乏人のくせに Christmas がめでたいなんてどうして思えるのかという考えが根本にあり、貧乏人ではなくても何かと物入りが多く得になることは一つもない Christmas は“merry” どころの騒ぎではないのではないかと確信している。そのために Christmas の楽しみの一切を“Humbug! (ばかなこった)”として一蹴するのである。そしてたった一人の身内である亡くなった妹の息子、つまり Scrooge の甥である快活で気のいい若者が、剣もほろろに断られても断られても毎年自分の家での Christmas の party に Scrooge を招待しに来るのであるが彼が言う Christmas の、kind, forgiving, charitable, pleasant time という定義も Scrooge の耳には反発以外の何物も生み出すことはできない。Christian の世界におけるその精神の本源である愛についても Scrooge は最近結婚したその甥との話の中で次のように言っている。

「お前は どうして 結婚したんだい？」

「彼女に恋をしたからですよ」

「恋をしたからだって？」 Scrooge は憤慨にして言った。もしも世の中に Merry Christmas よりもばかげた言葉があるとすればこれだと言わんばかりであった³³⁾。

つまり Scrooge の sin は、「19 世紀の 30 年代から 40 年代にかけて³⁴⁾」盛んにその兆しを見せていた「Christian charity の考え方 (concept) を強調する³⁴⁾」イギリスの Christmas の伝統の復活を、莫大な金持ちにもかかわらずなお金にしがみつこうとする欲物の立場から彼はそれを拒絶し、そしてさらに Christmas の祭自身がその具体例であるキリスト教精神の本源であるところの love をも彼は“ばかばかしいもの”として退ける、人間として恐れを知らない不遜な気持の持ち方であるところにあるのである。そしてこの Scrooge の人間としての精神性のあらゆる顕現を否定する徹底した欲物根性 (snobbery) は、Dickens からすれば窃盗や殺人などの法的な罪 (crime) にも勝るとも劣らないれっきとした罪であって、Scrooge は従って sinner として懲罰を受けねばならない立場にあると Dickens は判断するのである。それもその懲罰は、巷にあふれている極貧の人々への Christian charity の精神がいつにも増して要求されるその Christmas の日に成される必要があった。その Scrooge への懲罰として Dickens は四つの段階を考える。まず第一は Christmas の Eve に起った、の 7 年前に死んだ仕事の相棒であった Marley の亡霊の出現であり、第二は「彼の過去のクリスマスの幽霊」の出現、第三に「現在のクリスマスの幽霊」それから第四に「未来のクリスマスの幽霊」の出現へと続くのである。

(4)

罪人への罰の手段として Dickens によって使われる幽霊の代表的なものは、*Oliver Twist* の中で大泥棒の仲間である自分達を裏切ったとして、Bill Sikes が無惨に殴り殺した自分の恋人 Nancy の亡霊であろう。Nancy 殺しのその罪が露呈されれば確定されている、衆人のあざけりの中での縛り首という刑の重さに怯えて、Bill Sikes はあちらこちらと逃げ惑うのであるが、その刑よりも更に心理的な強い力で彼を圧迫していたのは寝ても覚めても彼の背後に前方に、あるいは頭上に居る Nancy の亡霊であり、特にその亡霊が彼をじっと見つめる“目”であった。*Sketches by Boz* の中の一小品である *The Drunkard's Death* の中でも、殺人を犯して逃げ惑う自分の息子を、我身を癒やすために警察に売った、のんだくれの行き場をなくした父親が、入水自殺をしようとして川辺に立った時、「不思議な怪奇な姿をしたものが水の中から上がって来て、黒くざらりとした目が水の中から彼を見つめ入水を躊躇している彼に洪面を作って見せ彼をせき立て遂に水の中に誘い込んだ」のであった。Bill Sikes が恐れている“目”については次のような記述がある。

暗闇の中に現われたただのガラス玉のように正気も輝きもない大きく見開かれた目、思い描くより実際に見る方がよりがまんで見る目。その中に光はあるものの何も照らし出す物のない目、それは二つしかないのにでもどこにでも見えた。それを閉め出そうとすると、忘れてしまっていたであろうものもちゃんとその見慣れた場所にあった。死体もまたそのままの場所にあった。そしてその目は、彼がそこを抜け出して来た時に見たままの目であった。彼は起き上がって外の畑に飛び出した。その姿は彼の後からついて来た。彼はもう一度小屋に入り体を丸くして横たわった。その二つの目は彼が横になり切らぬうちにもうそこにあった。

そして追いつめられた Bill Sikes はいちかばちかの命からがらの逃亡を企てようとしたのであったが、その最中に再びその目に出会ってバランスを失ない、逃亡のために自らかけた縄に首を巻かれて死んでいったのである。Oliver Twist の中では Bill Sikes は無口で飲んだくれでまともな口もきいたことのない手荒な、全く人間性を欠いた同情の余地のない盗賊として描かれているが、お互いの信頼だけで結ばれている盗賊の集団に長年属していながら、その仲間の信頼を裏切り絶対漏らしてはならない盗賊の集団の秘密を外部の有力者に漏らした Nancy の罪は大きいにもかかわらず、Nancy を殺してからの Bill の心は Nancy の亡霊と身の毛もよだつ気味の悪い彼女の“目”に一寸なりとも安らぐことができない。持ち前の性格から何の見境もなくかっとなって犯してしまった殺人ではあったが、その大変な罪に恐れおののく Bill Sikes の姿に Dickens はいかに悪人と言えども究極のところで露呈される人間的良心を描き出すのである。また前述の Drunkard's Death の中においてもその父親は入水する直前に自分にもかつてはあった「楽しく活気があった」我が家とそこに住まっていた家族のことを思い出すと同時に、酒に溺れるようになってから貧困の度が増して彼が父親としての愛を全くかけてやらなかったために死んだ子供達が墓を抜け出してはっきりとした姿で彼の前に立ち現われてもう一度彼をじっと見据える目を見たのであったが、それもまた死を覚悟した彼の、残り少ない命の時間に自分が犯したこの世での罪深い過去に対して示したせめてもの懺悔の気持の中に浮かび上った幽霊であったのだ。

このように犯罪者心理に強い関心があった Dickens は罪人を改心させるための罰としての幽霊の存在を想定しているが、その幽霊が出現可能な状況は罰としての意図とその罪人が内に秘めている潜在的な良心との呼応が確立されることによって初めて作られるのである。そして幽霊が罪を犯した者への罰 (punishment) の役割を担うのは、幽霊自身の正気の失せたうすきみ悪い“目”であろう。しかしそれとても罪人当人の良心が大きく係わるものであり、我々読者はそこに人間の究極にある善を確信している Dickens の人間観を見るのである。

Dickens のそのような性善説は Great Expectations の中の重罪人で今や死の床にある Magwitch の言動に明確に見ることができる。Magwitch は脱獄と殺人の罪を持ついわゆる重罪人であったが運良く死刑を逃れ Australia に島送りになった囚人である。Magwitch はイギリス本国で監獄船から脱走した Christmas Eve の日に、まだ小さな子供であった Pip と沼地で偶然行き会って Christmas のごちそうと足かせを切るやすり (Pip が養われている姉の家の旦那は鍛冶屋であった) を持ってきてもらったことをずっと恩に着ていて、Australia で辛苦して稼ぎ出した莫大な財の大部分を裏の弁護士を通じて匿名で Pip に送り、Pip を London に出して紳士の教育を受けさせて立派な紳士にすることに自分の余生のすべてをかける。やがて立派になった Pip を一目見るために密入国を企て Pip と再会を果すが、それは島送りの囚人として即刻死刑に値する行為であった。警察の目を逃れる日々もほんの束の間のことで捕えられ、そして死刑が執行される直前に病で息を引き取ったのである。Magwitch からの匿名のその送金が、貧しい上に子供ながら厳しく苛酷な姉の支配の下に怯えていた自分を救い出し、良家の子女としてぜいたくに暮らしている Estella と知り合ってから内々思っていた紳士になりたいという願望まで遂げさせてく

れ、まさに夢の中のでき事のような目くるめく幸運を彼にもたらししてくれるものであったとしても、その金の出資者がそのような重罪人であったことを知って最初は大きなショックを受けた Pip であったが、Australia から命をかけて自分に会いに来てくれそして今死刑の判決を受けた上に獄中で病の床に着いている Magwitch に Pip の心は次第に溶けて次のような感慨に浸るようになる。

狩り立てられ傷つけられ枷をはめられて今ここに私の手をしっかりと握っているその人の中に、私の恩人になろうとして何年も何年もの間ずっと変わらずに私に対して愛情深く感謝の気持ちに満ちそして寛大な心を持ち続けてくれた一人の人間を見たのである。私は彼の中に私が Joe に対して思っていたよりもはるかに善良な人間のただそれだけを見たのであった³⁶⁾。

そして Pip は彼はもっと「良い環境にさえあったらもっと善良な人になった³⁶⁾」のではあるまいかと内心想っている。更に Magwitch は獄中に伏せていたために彼の看護人も周囲の者達もみんな囚人であったのだが、彼らについても Dickens は次のように記述している。

彼 (Magwitch) に対しても私に対してもつらく当たる人は一人もいなかった。果たされなければならない義務もあり、実際に果たされたのであったが決して荒っぽくはなかった。役人 (部屋付きの) はいつも彼は確実に悪化の一途をたどっていると言い、同室の他の囚人患者達、それに看護人として彼に付き添っていた他の囚人達も (彼らは皆罪人ではあったが、神よ感謝す！皆親切な心を持ち合わせていたのだ) みんな同じような報告をしてくれた³⁷⁾。

このように人間を総体的に性善説の中でとらえている Dickens であればこそ、幽霊やその“目”が罪人に与える心理的な刑罰としての大きな意義を持つてくるのである。更に Dickens が罪人に与えるもう一つの刑罰に“鐘の音”がある。

(5)

A Christmas Carol の中でも鐘の音は一つのリズムを保ちながら聞こえてくるのであるが15刻みに鳴るセントポールの鐘の音が罪人の心理にどのような作用を及ぼすものであるかということについて Dickens は *Sketches by Boz* の中の A Visit to Newgate という話に出てくる一人の死刑囚の刑の執行までの最後の一夜に焦点を当てて明確に描いている。

死への恐怖はもはや気も狂わんばかりに高じていた。……全能の神にすぎる力もない。だがその神の中にだけ彼は慈悲と許しを乞おうとし、そしてその神の前だけに彼の後悔は役立つものとなった。……まるで死んだような通りの静けさ……St Paul の深く沈んだ鐘の音がきこえる — 1 時！……残された時はあと 7 時間！……冷たい恐怖のしずくが額に浮かぶ。……体のあらゆる筋肉が懊悩でぶるぶるとふるえる。……機械的に彼は聖書を取り上げた。……子供の時に読んただけでそれ以来聖書など頭に浮ぶこともなかった。しかし子供の頃のあの場所がああ時がああ部屋が — いやいっしょに遊んだ友達があたかもきのうのこのように鮮明に思い出される。忘れていた親切な言い回しや子供らしい言葉の数々が

たった今しがた話されたもののこだまのように、くり返し耳に響く。……あの音は何だ？……2時なのだ。あと6時間！……緊張と気持の動揺とでくたくたに疲れ彼は眠って……夢をみる……彼は気持のよい野原を妻と二人で歩いている。青い空が頭上にきらきらと輝き新鮮で果てしない期待があたりに満ちている。彼女は……ずっとずっと昔彼が愛していた時のいつものまなざしで彼を見ている。彼女は彼の腕にもたれかかり、やさしさと愛情のこもった目で彼の顔を見上げている。……場面は突然変り、彼は再び裁判の場面にいる。……法延は何と叫びに埋め尽くされていることだろう——頭・頭・頭の海——絞首台があり、足場がある。人々が彼をじろじろ見る目。判決「有罪」。何としても逃げるのだ。……彼は先に先にと走った……もう追手の心配はない。彼は土手に寝ころび体を伸ばし明け方まで眠るつもりでいる。……彼は寒くみじめな気持で目がさめた。朝のにぶい灰色の光が独房の中に入り込んできて、付添の牢番の上に落ちる。小さな独房のすべてのものは恐ろしいほど真実味があって、疑いをさしはさんだり間違えたりする余地はない。彼は再び死刑を宣告された重罪人……であったのである。もう二時間で彼は死体になるのだ⁹⁸。

つまり現代人が時計を見て時を知るのとは異なり、知りたくなくても耳にきこえてくる鐘の音は、刑の執行を翌日の朝に控えた重罪人にとっては、刻々と確実に命が削られていく恐迫観念となりその命へのいとおしさに初めて彼らは改悛の情にかられているのである。A Christmas Carol の中でも Marley の亡霊が予言した第一の幽霊 (Scrooge の過去の Christmas の幽霊) の出現の場面で、鐘の音が Scrooge の心理に大きな作用を及ぼしていることがわかる。Marley は夜中の一時にその第一の幽霊の到来を Scrooge に予告していた。その夜十二時に目を覚ました Scrooge は半信半疑ながら Marley のその予告のことが気になって眠れないままに寢床の中で息を潜めて十五分毎に鳴る鐘の音が約束の一時に彼を運んでいくのを次のような畏怖の念に押しつぶされそうな気持できいている。

きき耳をたてていた彼の耳に、遂に鐘が鳴り響いた。

「ゴーン ゴーン」

「15分過ぎた」 Scrooge は数えながら言った。

「ゴーン ゴーン」

「30分過ぎた」 Scrooge は言った。

「ゴーン ゴーン」

「15分前だ」 Scrooge は言った。

「ゴーン ゴーン」

「時間だ」 Scrooge は勝ち誇ったように言った。「何のこともないじゃないか！」

彼は一時の鐘が鳴り終わる前にそう言った。でもその鐘の音は深く沈む、鈍く空ろな、もの悲しい一時を告げる鐘の音だった。一瞬部屋にぱっと明りがさした。そして彼のベッドのカーテンが引かれた⁹⁹。

ここに見られる Scrooge の鐘の音への思いは、先にあげた A Visit to Newgate からの引用文の中の、自分の運命の時をもたらす刑の執行を控えた罪人がその残された時の経過に怯える心境に極めてよく似たものである。これは Dickens が Scrooge も重罪を犯した死刑囚もほぼ同等の罪人として認識していることの証であるが、Scrooge は Dickens 自身が判定した sinner であり、司法の手による絶対的な criminal ではないことから、Dickens は Scrooge には改悛しその

罪を清め *humanity* を取り戻すためのチャンスを与える。それが Marley の亡霊の出現に始まる第一第二第三の幽霊の Scrooge の許への訪問であるが、Scrooge の sin は Marley の亡霊の出現で幾分改善の兆しは見られるもののその罪はまだまだ根深く、Marley によってその後の three Ghosts の出現という刑の執行を言い渡された sinner として、その刑の執行時までの時を刻む鐘の音への Scrooge の畏怖は、上の引用文にあるように第一の幽霊の出現時におけるものが最も強く、第二・第三と心のあり方の改善の状況に応じて自然に薄らいで行き、第三の幽霊との邂逅の後ではもはやすっかりと人間性を回復した Scrooge の耳に届いたよく晴れ渡った Christmas の朝の鐘の音は、「これまできいたことがない美しい鐘の音⁽⁴⁰⁾」であって、この鐘の音は Scrooge にとってはまた再生を意味するものともなっているのである。

(6)

「世の中には貧乏であることほど苛酷なものはないのだ⁽⁴¹⁾」という一つの哲学を語る Scrooge の言葉にもこれまで述べてきたような当時の社会状況からしたら一つの真実を見る思いがするのであるが、その哲学にのっとって金の亡者となりその欲望追及のために人間の持つ神性な、つまり spiritual な部分を否定するどころか敵視すらしている Scrooge の、人間性の回復にまで至る道筋は、彼がもはや思考形態がすでに凝り固まっている老境にある者であることも考慮に入れば、気が遠くなるようなはるかなものに見える。しかし Dickens は彼の心を囲っている頑強な世俗の壁を少しずつ少しずつ壊しながら、まずは人間の中の精神性の存在に気付かせることから始める。それは Marley の死後 7 年目の Christmas Eve の晩遅く Eve であるにもかかわらずただ一人いつもの tavern (pub とも言われる特にむさ苦しい低級な酒場) でわびしい夕食をとって家に帰り着いた Scrooge が、その陰気な家の鍵前に鍵をさし込んだその一瞬、ドアの knocker が Marley の顔に変わるのを見たその時から始まる。当時の唯物的功利主義的社会で、ある程度の社会的な地位にある者達が大かたそうであったように (と Dickens は言っているが⁽⁴²⁾) fancy (空想) などというようなものは全く持ち合わせておらず、また Marley が死んで 7 年このかた Marley のことなど全く念頭に登らせたことのなかった Scrooge の目が、その日突然 Marley の顔を knocker に見たのは、その日の午後慈善事業のための寄付を募りに Scrooge の事務所にやってきた人達と Scrooge との話のやり取りの中で Marley の名前が何度となく出てきたことと、「過去の Christmas の Ghost」によって見せられた Scrooge のかつての恋人だった人の家で、今では美しい娘のいる彼女の幸せな家庭生活の中の特にその娘に対して「自分にもあんなふうに父と呼んでくれるあのように美しく頼れる娘があって人生の冬のこのたそがれの時期に春の息吹となってくれたらなあ⁽⁴³⁾」と思っていることから推測すれば、knocker に Marley の顔を見たすでにこの時、寄る年波が Christmas Eve というその日に何の楽しみもなく華やかさから一切背を向けている自分の中に潜在的に生まれていた何がしかの感傷からふと生まれた錯覚であると言えるのである。

しかし即物的な Scrooge の頭は、何ら特別の物ではないいつも見慣れている自分の家の

knocker に Marley の顔が現われるなどという超常現象を確かに見たと思いながらも「ばかばかしい (Humbug)」ことだとして即座にはねつけてしまうのである。そしてドアを閉めた時の家中に鳴り響いた反響音、暖炉一面にオランダ・タイルで施した聖書の絵模様に描かれた聖人やキリストの弟子達のすべてを、そこに突然現われた Marley の顔が全部呑み込んでしまったこと、部屋にあった呼鈴の突然の音、階下からきこえてくる重い鎖を引きずるようなじゃらじゃらという音、超常現象はそのように段階を踏んで Scrooge に迫った。しかしそれでも “It's humbug still! I won't believe it.” と頑としてそれに取り合おうとしなかった Scrooge も、腰の周りからみついた長い鎖にいくつもの錢箱やいろいろな種類の鍵前やら、何冊もの台帳やら証書類、鋼鉄製の重い財布などをつけて Marley の亡霊が彼の眼前に現われた時は「顔色が変わった」のであった。それでもなお“金”という物質の中でそれが作り出す唯物的な合理的な世界の中に生きている Scrooge は、幽霊 (ghost あるいは spirit) の本源である靈魂などの spiritual なものの存在を信じることはできない。Scrooge は今見ている Marley の亡霊は「消化し切れなかった牛肉の切れ端か、一たらしのマスタードか、一かけらのチーズか、生煮えのじゃがいもの切れ端⁽⁴⁴⁾」かで狂わされた自分の感覚が突発的に作り出した幻覚だと思って疑わない。Marley の亡霊は今 Scrooge が自分を見ている sense (感覚) 以上の reality はないのではないかと言うが、Scrooge の気持を動かすことはできない。しかし、これまで信じたこともないどころか想像だにしたことのない spiritual な ghost なる存在を前にして、そうであるからこそよけいに Scrooge はその亡霊に強い恐怖を感じ特にその“目”に対して「ほんの一瞬でも、うつろだが自分をひたと見すえているその目を見ながら黙って座っていたら我身は一体どうなってしまうだろう⁽⁴⁵⁾」と思い、そして「たとえ一秒間でもその幻 (vision) の石のような凝視を自分からそらせたい⁽⁴⁵⁾」気持ちに強くかられるが、それでもなお亡霊を、決して消化することのないつま楊枝を飲み込めば必ず現われる goblin であると言い、なおかつ亡霊などというものの存在を “Humbug, I tell you-humbug!” と言って拒絶する姿勢を崩さない。そのように頑迷な Scrooge にとにかく人間の持つ spiritual な側面を信じさせるという、その日 Scrooge の前に現われた自分の重要な役割の一つを遂行するために Marley の亡霊 (ghost あるいは spirit) は、そのような靈魂の化身としての亡霊の存在は信じなくても自分の目の前にいる怪物に大きな恐怖を感じていることは確かである Scrooge のその恐怖心を更に駆り立てるために、いきなり「ぎょっとするような叫び声を上げ」「陰うつな恐しい音をたてて」鎖を揺すぶり、さらにそのとどめとして頭から顎にかけて巻いていた布をとって下顎が胸の所まで落ちるのを見せたのである。Scrooge はこの上もない恐怖に襲われて Marley の亡霊の前に思わず跪き手を合わせて許しを乞い「私を信じるか」という Marley の問にやっと “I do.” と応えるまでになる。しかしこれは “Yes, I do.” ではないのだ。これはこれだけ恐しいものを見せられたら「信じない訳にはいかない」ではないかという単なる極限を越えた恐怖心が言わせたまでのものであって、そこにいるのがかつて仕事の partner であった Marley の霊の化身であることを十分納得した上での返答ではない。しかし幽霊というものの存在を理解させる上であればほどにまで堅固だった Scrooge の気持が幾分揺らいできたのを見てとった Marley の亡霊は、「すべての人の中にある靈魂 (spirit)」がその者の死後どのよ

うな境遇をたどるかということについて語り、自分の体に巻かれている世俗の呪縛としてのその鎖の意義と、それから Scrooge の鎖は今でも自分のものよりもはるかに長くなっているはずであることを Scrooge に説く。更にその亡霊は “No rest, no peace” でそれにまた「激しい悔いの心」にさいなまれているにもかかわらず現世での力を失くした今となってはもはやどうすることもできないのであることを切々と Scrooge に訴えている。それでもなおかつ Scrooge は Marley のその話に対して、business-like な対応しかしていない。それでも Marley は自分が Scrooge の所に現われたもう一つの目的である Scrooge の「世俗一点ばり」の生活を何とか改めさせるために彼の話を次ようにしめくくる。

「人間であることが私の商売であったのだ。公共の福利が私の商売であったのだ。慈善、哀れみ、寛容、慈悲、これらがみんな私の商売だったのだ。……」「巡りゆく年の中でこの時期に私は一番苦しむのだ。なぜ私は群がる同袍達を振り切って歩いて来たのであろう。どうして東の国の博士たちを貧しい住まいに導いたあの聖なる星を見上げなかったのだろうか。その光が私を導く家もたくさんあったのに！」

これをきいて Scrooge は亡霊の存在を信じる信じないということより先に、現在の自分の在り方に鋭いメスが入られたのを感じてかたがたふるえ始める。Marley の亡霊は Scrooge には死後、自分のような辛く悲しい魂の放浪を避けるチャンスと希望があることと、そのためにはそれから次々と現われる Three Spirits の助けが必要であることを告げて立ち去るが、Marley の ghost のその言動を通じて Scrooge はそれに対してある畏敬の念を持ちつつもまだそうした魂の化身を信じるまでには到っておらず、Marley の亡霊にうっとうしさすら感じていたのがあった。しかし Marley が出て行くために開けた窓の外からきこえてきた、後悔と嘆きと自分を責めさないむ何とも名状しがたい悲しみにあふれた声をきき、思わず窓際に寄って外に見たその呻き声の主である空中に充滿している幽霊達のその悲しみの原因がすべて、「今の人間達のことと何かしてやりたいとどんなに思ってもその力を永久に失ってしまった⁴⁷⁾」ことにあることを知った上に、その亡霊達の中にはかつて彼の知り合いだった人のものも多く、もはや Marley の亡霊によって示された sinner の行き着く先である幽霊なるものの存在の普遍性を Scrooge は何となくそこに認識せざるを得なくなったのである。

(次号に続く)

注

- (1) Dickens の最初の刊行小説である ‘A Dinner at Poplar Walk’ が 1833 年に *Monthly Magazine* に掲載される。
- (2) 1834 年に reporter (探訪記者) となりその仕事から生み出されたもの。
- (3) Queen Elizabeth I ; (1533 – 1603) (在位 1558 – 1603) イギリス国教会確立。重商主義政策を推進し、ルネッサンス開花に寄与。スペインの無敵艦隊を破って海外発展の基礎を固める。
- (4) Queen Victoria (1819 – 1901) (在位 1837 – 1901) 1877 年以降インド皇帝を兼任。その治世は議会政治の発展、商工業の発達、広大な植民地支配など大英帝国最盛期に当たる。
- (5) 「イギリス文学史」(斎藤勇 昭和 39 年 6 月 25 日 研究社出版株式会社) P443

- (6) Tolstoi : (Lev Nikolaevich T.) (1828 - 1910) ロシアの小説家、批評家。著作は 19 世紀後半の複雑なロシア社会の実相を描き、リアリズム文学の最高峰とされる。また人道主義の立場から社会・宗教・人生の問題について生涯煩悶を重ねた求道的・実践的思想家として、国境を越えて多くの追従者を得た。代表作「戦争と平和」「アンナ＝カレニナ」「イワン＝イリイッチの死」「復活」等 評論「芸術とは何か」

- (7) 『オリヴァ・ツイスト』(下) (岩波文庫, 1989 年 4 月 訳者・本田季子) 解説

- (8) *Oliver Twist* 中の有名な一場面の一つに、一食に極薄い粥を粥椀に一杯きりでは空腹に堪えられず、「いつか隣に眠っている子を食べってしまうかもしれない」という少年も現われて、「夕食後院長の所に進み出てもっと下さい」と頼む者のくじ引きが院内(救貧院)の少年達の間で行なわれ、オリヴァーが当たりそれを実行したのであった。当然のこととしてオリヴァーは独房に監禁された。(第二章)

- (9) 「自然に帰れ」(Return to Nature)

- (10) Jean Jacques Rousseau : (1712 - 1778) フランス啓蒙期の思想家・小説家。「人間不平等起源論」「社会契約論」などで文明や社会の非人間性を批判、独自の人民主権思想を説いてフランス革命の先駆となった。啓蒙主義を越えて、自然状態の理想化や浪漫主義もみられ、全人教育論「エミール」、自伝的作品「告白録」、小説「新エロイーズ」など多面的な著作を残した。

- (11) Wordsworth : (1770 - 1850) William Wordsworth : イギリスローマン派の代表的詩人。親交の厚いコールリッジと共に湖畔詩人と呼ばれ、共著「抒情民謡集」において自然美を平明な日常語で歌い、イギリス詩壇に一時期を画した。桂冠詩人。自伝的抒情詩「序曲」など。

- (12) *Century Reading in English literature* (Fifth Edition) Wordsworth の *My Heart Leaps up When I Behold* の訳

空にかかった虹を見ると／私の心は踊ります。

私の人生が始まった時もそうでした；

大人になった今もそうです。

年をとっても変らないことでしょう。

そうでなかったら死んだ方がいい！

子供は大人の父なのです。

だから私の日々のそれぞれが／自然を敬う心で結ばれていってほしいものです。(1807)

- (13) 「構想 14 号」(1989 年 3 月 新星プリント) 筆者のエッセー「ワーズワースの詩における『子供』の発見について」1 章参照

- (14) *My Heart Leap up When I Behold* の詩の一句。「自然を敬う心」

- (15) Dickens は当時の世の中の unnatural なものとして *Dombey and Son* の 47 章で次のように言っている。

不自然な社会からの追放者、つまり野蛮な習性において不自然な者、品位の欠如において不自然な者、善悪の判断があらゆる点で欠落していたり混同したりしている点で不自然な者、無知や悪徳や軽率さや不従順、精神、外見などあらゆるものにおいて不自然な者。

そして更に unnatural なものが natural なものに及ぼす影響についても次のように言っている。

「自然科学的立場に立って見られた人間の健康を研究している学者達は、汚れた大気から上がってくる有毒粒子が目にはっきりそれと見えるなら、我々はそれがそのような(貧民の群れている)場所の上に濃い黒雲となって低くたれこめ、そしてゆっくりと町の立派な地域にも押しよせ侵していくのが見えるであろうと言っている…そのように我々は墮落、不敬、泥酔、窃盗、殺人、それにまた人類の自然の喜怒哀楽に対する名もなき一連の罪がその呪われの地にのしかかり、ひたひたと

浸透して純真な子供を破滅させ、純粋な者達にもまた腐敗をはびこらせていくのを見るのである。

- (16) George Eliot ; (1819 - 1880) イギリスの女流小説家。本名 Mary Ann Cross (旧姓 Evans)。心理主義小説の先駆者の一人。代表作「フロス河畔の水車小屋」「サイラス＝マーナー」など。

- (17) 「世紀末までの大英帝国」(1987 年 4 月 法政出版、長島伸一著) P99

- (18) 前述・「イギリス文学史」P374

- (19) Friedrich Engels ; (1820 - 1895) ドイツの革命家・思想家。マルクスと科学的社会主義を創始し、「ドイツイデオロギー」「共産党宣言」を共同執筆した。またマルクスの「資本論」第二・三巻を整理・刊行。著「反デューリング論」「空想より科学への社会主義の発展」「家族・私有財産・国家の起源」など。

- (20) 前述「世紀末までの大英帝国」P129

- (21) A Christmas Carol の第三の幽霊の章にも似たような場面が紹介されているが「ディケンズとロンドン」(研究者選書 昭和 56 年 7 月 松村昌家) の 12 頁に貧困の悲惨な路地についてのディケンズの記述がある。これは「ラット・カールス」という泥棒の巣窟に彼 (Dickens) が足を踏み入れた町の様子である。

このむかつくような悪臭のるつぼ、これらの汚物の堆積、崩れかかった家屋、そして生物無生物を含めて、そこらじゅうの不潔な物体が黒い道路に向かって泥土のように流れ込んでいる場所に立って、いったい自分達が現にこの空気を吸っているのだと信じ得る人が果たして何人いるだろうか。

- (22) 資本主義体制の確立によって台頭してきた資本家や商人などの中産階級は金で貴族の地位まで買収して貴族階級に参入したり、金の力は、つまり金権は、社会に於ける力を増して「貨幣万能時代」をもたらしたのである。

- (23) David Copperfield (Penguin Classics) の中に次のような記述がある。(16 章)

「この世の中の害と言えばその多くが(金を追い)あくせく働いている人達のしわざによるものなのです。それは間違いありません。この 1、2 百年というもののやれ金もうけだ、権力だってあくせく走り回ってきた人たちは一体何をしてきたというのでしょうか。悪事じゃないでしょうか」

- (24) 後に例として上げている Sketches by Boz の中の A Visit to Newgate に出て来る囚人

- (25) A Christmas Carol STAVE ONE

- (26) 週給 15 shilling と言えば年間 39 ポンドである。当時の低所得者の年間所得の上限が 50 ポンドであることから Bob Cratchit の家は低所得者層の中でも下の方にあり 6 人の子供と夫婦の 8 人の暮らしは大変に厳しいものであったことが予想される。それでも転職などとてもできない当時の社会事情の中で Scrooge からの解雇を示唆する言葉に怯えている。

- (27) A Christmas Carol Penguin Classics の Introduction

- (28) A Christmas Carol a STAVE ONE にそのような路上生活者の仕事の一端の描写がある。

そのうちに霧と暗闇がとて濃くなってきたので人々はたいまつを持って走り回り、馬車馬の道案内をさせてほしいと言っていた。

又 Sketches by Boz の中に出てくる飲んだくれの男は所用で乗って来た馬を離れる紳士のその馬の番をしてジンの飲み代に当てている。

- (29) 債務者拘置所 (prison in civil process), 借金があるのに返せない人々が入る拘置所、Dickens の父親と家族もここに入ったことがある。

- (30) 救貧院 ; イギリスの貧民収容施設 17 世紀後半から 20 世紀初頭まで見られた。そこで人々はまいはだなどを作った。

救貧院の子供達の生活の様子は Oliver Twist の中に詳しく描かれている。: Poor Law に基づく施設

(31) そこで生きるための最低の食糧は与えられたが *Oliver Twist* の主人公 Oliver に見られるように、そういう所で暮さざるを得ない屈辱と扱いの悪さに積極的にそこに入りたいと思う人々は少なかったのだ。

(32) これは Malthus (Thomas; 1766 - 1834; イギリスの経済学者) の「人口論」(*An Essay on The Principal of Population*. 1798 年) からの phrase である。

Malthus はどのような人が「余分な (surplus) 人」であるかということを彼のその「人口論」の中で明らかにしている。

もし親から正当な食いぶちを与えられなかったり、もし社会が彼らの労働を必要としていない者たちは食物を得る権利は全くない。存在している権利もない。自然の神の与える食事にはそのような者への供給の用意はなく、死んでいくことが自然の摂理なのだ。

(*A Christmas Carol* · Penguin Classics, Note 10)

(33) *A Christmas carol* STAVE ONE

(34) Introduction of *A Christmas Carol* (Penguin Classics)

(35) *Oliver Twist* chap. 48

(36) *Great Expectations*, chap. 54

(37) 同上 chap. 56

(38) *Sketches by Boz* (Penguin Classics) A Visit to Newgate

(39) *A Christmas Carol* STAVE TWO

(40) 同上 STAVE FIVE

(41) 同上 STAVE TWO

(42) the corporation, aldermen and livery: The Corporation is the governing body of the City of London, the senior members of which are called Aldermen: Liverymen were members of one of the ancient Guilds of London. (*A Christmas Carol*, note 17)

(43) *A Christmas Carol* STAVE TWO

(44) 同上 STAVE ONE

(45) 同上

(46) 同上

(47) 同上

参考文献

1. 「ヴィクトリア朝の文学と絵画」 (世界思想社 松村昌家 1993 年 4 月)
2. 「イギリス文学と監獄」 (開文社出版株式会社, 中西敏一, 1991 年 5 月)
3. 「十九世紀英文学」 (研究社出版株式会社, 島田謹二, 昭和 39 年 5 月)
4. 「子どものイメージ」—十九世紀英米文学に見る子どもたち— (1992 年 10 月 松村昌家)
5. 「イギリス文学史 概説」 (創元社, 三ッ星堅三, 1993 年 6 月)
6. 「英米文学史 講座」9 (研究社出版株式会社, 福島隣太郎・西川正身, 1991 年 2 月)